

49 当院初診時の神経心理学的所見から見た高次脳機能障害者の就労・非就労について

病院リハビリテーション部¹、病院第一診療部精神科²

北條具仁¹、浦上裕子^{1,2}、山本正浩¹、菅野博也¹、山下文弥¹

【目的】高次脳機能障害者の就労・非就労と神経心理学的検査との関係についての報告は多い(用稲ら 2008, 澤田ら 2010, 赤嶺ら 2015)。神経心理学的検査のみで予後を予測することは困難であるが、注意機能や遂行能力などの生態学的行動評価は、就労と関連があることが示されている。今回、当院で就労を目標にリハビリテーション(以下リハ)を行った患者を対象に、初診時の神経心理学的検査所見を検討し、就労群と非就労群の特徴について検討したので報告する。

【対象】2013年4月から2017年3月の間に当院を受診し、発症(受傷)前に就労(正規・非正規・パート)しており、CAT、WAIS-III、RBMT、BADSを初診時から3カ月以内に全て評価した68人を対象とした。対象の内訳は男性53人、女性15人で、20~68歳(44.5±14.3)であった。発症(受傷)から当院初診までの経過日数は12日~4211日(334.9±1135.4)であった。原因疾患は外傷性脳損傷23人、脳梗塞14人、脳出血8人、くも膜下出血8人、脳炎8人、脳腫瘍3人、その他4人であった。

【方法】対象者の就労の帰結から就労群(復職、新規就労、障害者雇用枠、41名)と非就労群(無職、休職、退職、27名)に分類し、2群の初診時の神経心理学的検査所見を比較した。知的機能はWAIS-IIIのIQと群指数、遂行機能はBADSの下位検査6項目と合計点、記憶はRBMTの標準プロフィール点(SPS)とスクリーニング点(SS)、注意機能はCATの下位検査7項目を用いた。2群間の成績をスチューデントのt検定を用いて検討し、またスピアマンの順位相関分析を行い、検査間の関連についても検討した。有意判定基準は5%未満とした。

【結果】就労・非就労群間で有意差を認めたのは、WAIS-IIIのPIQ、FIQ、PO、WM、PS、BADSの規則変換、鍵探し、動物園地図、RBMTのSPS、SS、そしてCATのSDMT、記憶更新検査3桁および4桁、PASAT2秒、上中下検査、CPT AX課題のSDであった。検査間の相関は、就労群で特にWAIS-IIIとCATが一部の低位項目間で有意な相関を認めた。つまりPIQとSDMT、記憶更新検査、PASATで、WMと記憶更新検査で、そしてPSとSDMT、PASATで、低位項目間で有意な相関を認めた。

【考察】今回は発症(受傷)から1年以上経過した慢性期の患者を対象としたが、初診時(リハ開始時)に一定の注意機能や遂行機能が保たれている場合には、就労を目標とした認知リハの効果が期待できる可能性がある。就労に向けた慢性期リハの有効性が報告されているなかで(浦上 2015)、就労に至らない者に対するリハの在り方を、就労までの時間経過や職種など様々な要因を含めて今後、検討する必要があると考えた。